

詩編 146 : 1~10

マタイによる福音書 5 : 6

「義に飢え渴く人々は幸い」

【招詞】 詩編 51 : 12~14

【讚美歌】 25 「父、子、聖霊に」

【詩編交読】 詩編 130 編

【赦しの宣言】 イザヤ書 55 : 7 「主に立ち帰るならば、主は憐れんでくださる。

わたしたちの神に立ち帰るならば／豊かに赦してくださる。」

【讚美歌】 7 「ほめたたえよ、力強き主を」

【祈祷】

【聖書】 詩編 146 : 1~10

マタイによる福音書 5 : 6

【説教】 「義に飢え渴く人々は幸い」

<義、正しさとは>

イエスさまの「山上の説教」から、一節ずつ御言葉を聞いています。今日は、「義に飢え渴く人々は、幸いである、／その人たちは満たされる。」というところです。

「義に飢え渴く人々は、幸いである。」義は、正義の義です。日本語では、正しいこと、よいこと、の意味で、条理とか、道徳とか、そういう意味も含むようです。

「義に飢え渴く。」確かに世の中は、正しくないこと、悪いことで、溢れているように思います。不条理なこと、不公平なこと、戦争も、貧困も、格差も、分断もあります。その中では、悪い者こそが栄えていたり、良い思いをしている、ということもあります。

そういう不公平がなくなって欲しい。不条理なことが起こらないで欲しい。すべての人が正しく歩む世の中になって欲しい。確かにわたしたちには、そのような義を、正しさを、求める思いがあると思います。

では、わたしたちは、「義に飢え渴いている人々」だ、と言えるのでしょうか。

義を求めること、正しさを求めること、これは確かに大切です。

でも、ともすると、正しさを求めていくとき、わたしたちは、正しくないと思う人を見つけて、裁き始めます。正しくない世の中に、憤り始めます。そして、誰が悪い、これが悪いとって、世の中や人々を、断罪し始めるのです。

そしてさらに、わたしたちは時々、その矛先を、神さまにさえ向けることがあるのではないのでしょうか。

神さまは、どうして、こんな不公平な世の中をゆるしておられるのか。どうして、悪が栄えて、正しく生きようとしている人が苦しむのか。どうして、戦争を放っておいて、弱い人々が虐げられていくのか。

神さまが、さっさと悪人を滅ぼしてくだされば良いのではないか。どうしてこんな悲惨な状況を、神さまは放っておかれるのだろうか。

…わたしたちは、神さまが、まるでずっと黙っておられるかのように。ただ遠くから眺めて、何も手を出してくだらないかのように、感じることもあるかも知れません。

でも、よく考えてみたいのです。悪人が滅びたらいい。罪人が裁かれたらいい。

そう思っているとき、わたしたちは、自分は悪人の側ではない。自分は罪人の側ではない。自分は、世の不条理に、不公平な状況に、加担していない。そうやって、自分を正しい側の人間だと思っているのではないのでしょうか。

しかも、自分は正しいと思っているとき。わたしたちが心に描いているのは、わたしが望む正しい世界。わたしの理想に適った義。わたしの願っている公平さ。わたしの納得する条理が通っている世界。それが、正しいと思っているのです。

そして、それぞれが心に描く正しさは、実は、みんな違います。環境によっても、文化によっても、価値観によっても、異なります。

ですから、わたしたちが、それぞれの義を通そうとして、自分の正しさを主張するとき。わたしたちは、互いに裁き合い、断罪し合い、排除し合うことになるのです。

そして、それこそが、今の世界の悲惨な現状と言えるのかも知れません。

<神の義>

…でも、本当にすべての人間が従うべきなのは、神さまの義、神さまの正しさです。神さまに造られたわたしたちは、神さまの正しさをこそ、基準とするべきです。

神さまの正しさとは、わたしたちが、唯一の神さまだけを、まことの神さまとすることです。それは、人が、神さまを礼拝し、神さまとして崇め、神さまの御心に従うこと。神さまと人間との間に、創造主と被造物としての、正しい関係があることです。

そして、わたしたちを愛してくださる神さまを、わたしたちも愛し、さらに、隣人を自分のように愛すること。

これが、神さまが正しいとされること、神さまが求めておられる正しさ、神さまが義となさることです。

そして、神さま御前で、義なる者、正しい者が救われ、正しくない者が滅ぼされること。それが、神さまの義が行われる、神さまの義が貫かれる、ということなのです。

…でも、そうであるなら、わたしたちの中に、義とされる者、正しい者など、本当にいるのでしょうか。わたしたちは本当に、まことの神さまだけを、まことの神としているのでしょうか。わたしたちは、神さまの御心に、すべて従っているのでしょうか。

いやむしろ、自分を神さまのようにして、自分の願いを、神さまに叶えさせようとしている。神さまの御心、神さまの正しさに従うのではなく、自分の思い、自分の正しさに従って生きようとしている。そして、神さまも、隣人も、愛することが出来ないでいる。

わたしたちは、神さまの御前で、そんな不義な歩みしか出来ていないのです。神さまの義を、神さまとの正しい関係を、求めることさえしていないのです。

そして、それこそが、わたしたちが、造り主である神さまに対して犯している、とても深刻な、重大な、罪なのです。

…先ほど、わたしたちの心の中に、どうして神さまは悪人をさっさと滅ぼしてくださらないのか。どうして罪人を全部裁いてくださらないのか。そういう思いが沸き起こることがあるのではないかとお話ししました。

でも、もし、神さまがそうやって悪人をさっさと滅ぼされるなら。わたし自身もまた、一緒に滅ぼされることになるのです。

そして、地上には誰も残らないでしょう。誰一人、神さまの義、神さまの正しさに、完全に適う者はいないからです。

そうやって、わたしたち自身が、神さまに背き、神さまの義の前で悪を行っているのですから。「義に飢え渴く」「神さまの義を求める」「神さまの義が貫かれることを望む」ということは、わたし自身が、神さまの正しい審きによって、罪に定められて滅ぼされる、ということになってしまうでしょう。

そうであるならば、そもそもわたしたちは、義に飢え渴けるような立場ですらない、ということなのです。

わたしたちが、本当に自分の罪を知っているなら。神さまの御前で、自分の状況を弁えているなら。とてもではないけれど、神さまの正しい裁きがなされること、神さまの義が貫かれることを、飢え渴くように願い求めることなど、出来ないのではないのでしょうか。

…しかしその一方で、人々の不公平や、不条理や、悪によって、苦しめられ、抑圧され、虐げられている人々がいることも、確かな現実です。それを見過ごしたり、仕方ないと諦めたりして良いはずがありません。

そして、まさに今、自分自身が、そのような苦しみ、悲しみを負って、涙を流している。傷ついている。そういう方も、この中にいらっしゃるかも知れません。

神さまの義に従えない自分。同時に、神さまの義に従わない他の人々によって、苦しめられている自分。そして、不公平や不条理や悪に満ちている、どうしようもない世界で、弱く、小さくされている、たくさんの人々…。

わたしたちは、この中で、どのようにして、神さまの義を求めればよいのでしょうか。どのようにして、義に飢え渴く、幸いな人々になることが出来るのでしょうか。

<義を与えてくださる方>

「義に飢え渴く人々は、幸いである、／その人たちは満たされる。」

さて、ここでわたしたちは、この御言葉を語ってくださっているのが、神の御子イエスさまであること。そして、この御言葉を聞いているのは、イエスさまに招かれ、応え、従ってきた弟子たちと群衆であったことを思い起こしたいのです。

そして、従ってきた弟子たちと群衆とは、今ここに、イエスさまに招かれ、お応えし、御言葉を聞いている、わたしたちのこともあります。

この御言葉は、イエスさまご自身が、御自分の招きに応え、従ってきた者たちに語っておられる、というところに意味があるのです。なぜなら、このイエスさまこそが、わたしたちの義を満たしてくださるために、来てくださったお方だからです。

イエスさまは、神さまの義を貫かれるために、満たすために、この世に来られました。

それは、場合によっては、わたしたちの上に、神さまの厳しい審きを下し、わたしたちを罪に定め、滅ぼす、という方法でも良かったのです。そのようにして、神さまの義が貫かれ、神さまの正しさが現わされるとしても、何もおかしくはないのです。

でも、神さまは、そのようにして、御自分の義が満たされることを望まれませんでした。

なぜなら神さまは、お造りになったわたしたちを、あまりにも愛しておられるからです。わたしたちが、どんなに罪を犯しても、背いても、不義であっても、滅ぼすことを決して望まれなかったからです。

しかし、わたしたちの罪は、神さまの正しさの前に、きちんと審かれ、その報いを受けなければなりません。罪を曖昧にすること、悪を見過ごすことは、それこそ不正なこと、不義なことだからです。

ですから、神さまは、わたしたちを滅ぼさずに、しかし、御自分の義を貫かれるために、御自分の御子イエスさまに、わたしたちの代わりに、すべての審きと、罪の判決と、滅びの死とを、負わせられたのです。

神の御子イエスさまは、このご計画を実現するために、まことの人となって、この世に来てくださいました。

このお方は、この世でただ独り、神さまに対して罪を犯されない、まことに義なる人でしたが、神さまの義に背く、罪人たちの只中で、この地上を歩られました。

ですから実は、神の御子イエスさまこそ、この世の不義の中で、不正の中で、まことに神の義の飢え渴きを、最も深く味わわれた、唯一のお方なのです。

そのゆえにイエスさまは、人々の罪によって追いやられた、小さい者、貧しい者、弱い者、排除された者たちと、いつも共にいてくださいました。

そして、誰よりもご自分が、人々から抑圧され、迫害され、暴力を受け、あらゆる不公平、不条理、不正の中で、十字架に架けられたのです。そして、叫ばれました。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか。」

神さまの義が、神さまの正しさが、まったく見当たらない。神さまの御心に従う者が、誰もいない。そして、正しさが曲げられ、無実なものが有罪とされ、偽りと暴力で排除される。そんな、不義の苦しみのどん底を、イエスさまは歩まれたのです。

しかし、そのゆえに、イエスさまは、わたしたちのあらゆる苦しみ、悲しみ、叫びを、ご存知であります。不義に涙し、正しさを求める、心からの義の飢え渴きを、イエスさまは誰よりもご存知であります。

わたしたちがこの世界で、正しさを歪められ、抑圧され、排除され、苦しみの中で泣き叫んでいるとき。そこには、神さまがおられないどころか、もっと深い苦しみの中で叫んでくださった、十字架の神の御子が、共におられるのです。

そして、イエスさまは、必ずその苦しみ、叫びの只中にある者に、救いの御手を伸ばし、苦しみを癒し、涙を拭い、慰めを与えてくださいます。

義に飢え渴き、叫びつつ、十字架で死なれたイエスさまは、その三日の後に、復活させられ、栄光に与られました。それは、この苦しみ、悲しみ、叫びが、必ず神さまの御力によって、癒され、満たされ、慰められるということの、確かな保証なのです。

そして同時に、イエスさまが受けられた十字架の苦しみと死は、神さまの義に背いた、すべての罪人が、わたしたちが、その身に受けるべき、審きの死でした。

神さまに対するわたしたちの罪を償うために、神さまの義が貫かれるために、神の御子イエスさまは、その命をお捨てにならなければいけなかったのです。神の御子の死を必要とするほどに、わたしたちが神さまの義に背いた罪は、深刻で、重いということです。

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」との叫びは。神さまの御前に罪を犯し、審かれ、もはや神さまと共に生きることの出来ない、罪の果てにいる、神さまから最も離れた罪人が、叫ぶべき叫びでもあります。

しかし、その、わたしたちが叫ぶべき叫びを、イエスさまが代わりに叫んでくださいました。そして、わたしたちが受けるべき、神さまから引き離される滅びの死を、イエスさまがご自分の十字架に、引き受けてくださったのです。

そして、父なる神さまは、この御子イエスさまの十字架の死を、わたしたちすべての罪の償いとすることによって、御自分の義を貫いてくださいました。

そして、わたしたちの罪を赦し、正しい者と見做してくださった。神さまの御前で、義なる者であると、宣言してくださったのです。

何と、一方的な赦しであり、恵みであり、救いでしょうか。

しかし、これこそ、神さまがわたしたちに示してくださった、愛なのです。

わたしたちは、自分のあらゆる苦しみも、罪も、悪も、審きも、死も、すべてをイエスさまにお渡しして良い。丸投げして良い。

そして、イエスさまの方は、御自分の正しさも、義も、罪の贖いの死も、復活の命も、神の子の身分も、神さまの救いの恵みのすべてを、わたしたちに与えてくださるのです。

こうして、罪人であったわたしたちは、自分の罪を、すべてイエスさまにお委ねすることによって。神さまの義を与えられ、滅びに渡されることなく、神さまと共に、永遠に生きる者としていただくことが出来るのです。

<幸いな人>

だから、わたしたちは今や、イエスさまにあって、義に飢え渴いて良いのです。

「義に飢え渴く人々は、幸いである。」義に飢え渴くことが出来る人は、幸いです。

神さまの義を、飢え渴くほどに、心から求めることが出来るのは。神さまの義が現わされる時、わたしたちが受けるべき罪の審きは、すでにイエスさまが代わりに受けてくださったことを、知っているからです。

イエスさまが、罪人のわたしたちを、義としてくださったことを、知っているからです。

だから、わたしたちは、自分もそうしていただいたように。世のすべての者が、イエスさまの十字架の御許で、神さまの義、神さまの正しさを知ることが出来るのです。

だから、義に飢え渴くことが出来る人々は、幸いです。

したがって、「義に飢え渴く」とは、最初に申し上げた通り、決してわたしたちが、裁き合ったり、自分の正しさを貫き合ったりすることではありません。

イエスさまに十字架で死んでいただかなければ、義と認められることがなかったわたしたちは、自分の中に、まったく正しさがないということ。わたしたち自身が、まことに不義な者であり、どうしようもない罪人であるということ、はっきりと知らされているからです。

むしろ、イエスさまによって義とされた者は、常に自分の罪を見つめ、悔い改める者となるはずです。

そして、救われても、義とされてもなお、罪や悪を繰り返そうとする自分が、神さまの義に、しっかりと留まることが出来るように。義とされた者として、神さまの求めておられる歩みが出来るように。御力と助けを求めて、切に祈り願う者となるのです。

ですから、イエスさまに義とされた者は、自分の正しさではなく、神さまの正しさ、神さまの義を、ただひたすらに求めます。神さまの義にこそ、飢え渴きます。

そして、自分も、人々も共に、自分の不義を、自分の罪を、すべて負ってくださったイエスさまの十字架の御前にへりくだり。罪を悔い改め。神さまをまことの神として礼拝し、その御心に従う、義に満たされた世界が実現していくことを、心から祈り求めるのです。

まことに、神さまの御前に喜ばれる、正しい世界。わたしたち、すべての造られた者が、神さまを愛し、また互いに愛し合う世界となることを。この世にあって、飢え渴くように、わたしたちは、祈らずにはいられないのです。

「義に飢え渴く人々は、幸いである。」

そして、イエスさまは仰います。「その人たちは満たされる。」

義に飢え渴く人々は、満たされます。それは、もちろん、イエスさまによってです。

「その人たちは満たされる。」

これは、イエスさまが、神さまの義を、すべてのすべてにおいて満たしてくださる、完全に現わしてくださる、という、約束の御言葉です。

それは、救いの完成、神の国の完成、ということに他なりません。

イエスさまは、終わりの日に、再び来られます。そして、最後の審判において、神さまの義を、完全に現わして下さり、満たして下さり、わたしたちの救いを完成させていただきます。

義とされたにも関わらず、世において、わたしたちに最後までまとわりついていた罪と死が。完全にうち滅ぼされ、涙が拭われ、深い慰めを与えられ、わたしたちの飢え渴きが完全に満たされる日が、必ず来るのです。「その人たちは満たされる」

ですから、わたしたちは、この約束を待ち望みつつ。罪を赦し、義を満たして下さるイエスさまの十字架が、わたしたちの上に、この世界の一人一人の上に、立てられていくことを。そして、すべての者が、イエスさまによって、神さまの義に覆われ、神さまの恵みに包まれ、罪を悔い改めて、共に神さまを賛美するようになることを。この世界の中で、心から飢え渴きつつ、求めていきたいのです。

「義に飢え渴く人々は、幸いである、その人たちは満たされる。」

わたしたちが、この世のすべてが、十字架と復活のイエスさまの御許で、神さまの義に満たされますように。

【お祈り】

天の父なる神さま、御名をほめたたえます。

あなたは、その義を、イエスさまの十字架において現わし、貫いてくださいました。

その十字架の御許で、わたしたちは罪の審きと死を免れただけでなく、罪の赦しを与えられ、義なる者とされ、命を与えられ、神の子として生きることがゆるされました。

驚くべき恵みに、心から感謝いたします。どうか、イエスさまが成し遂げ、満たして下さった神さまの義を、そして、わたしたちに向けてくださっている愛の深さを、世のすべての者が知り、受け入れることが出来ますように。

そしてわたしたちが、イエスさまの御跡に従い、御前に罪を悔い改め、自分の正しさを捨て、ただあなたの正しさ、あなたの義を求めて、歩いていくことが出来ますように。

そこにおいてこそ、わたしたちはこの世において、互いに愛し合い、赦し合い、共に生きてゆくことが出来ると信じます。どうか、あなたの義が、満たされますように。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讚美歌】 5 1 7 「神の民よ」

【信仰告白】 ニカイア信条

【聖餐】

【讚美歌】 7 8 「わが主よ、ここに集い」

【十戒】

【献金】 6 5 - 1 「今そなえる」

【主の祈り】

【祈祷】

【讚美歌】 2 6 「グロリア、グロリア、グロリア」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン